川上 高司 ブログ アーカイヴ

2015年

6月1日

サウジアラビアの不安

5 月 29 日、サウジアラビアのペルシャ湾に臨む街のシーア派モスクでテロが発生した。犠牲者は 3 名と少ないが、その前週の 22 日に発生したシーア派モスクを狙ったテロでは 21 名が犠牲になっている。この 2 回のテロはいずれもイスラム国の犯行声明が出されている。サウジアラビアではイスラム国で戦闘経験を積んだ若者が帰国して国内でテロを起こすことを懸念しているが、まさにその懸念が現実のものとなりつつあるようだ。

サウジアラビアにはおよそ 300 万人、１０～１５％のシーア派が居住している。主にペルシャ湾岸地域とイエメンとの国境付近に集中している。彼らは厳格なスンニ派が主流のサウジアラビアでは異端視され、長年差別されてきた。その不満が時折噴出し、前国王はシーア派とスンニ派の宥和に気を遣ってきた。

だが、イスラム国は容赦なくそこにつけ込んできた。シーア派へのテロを繰り返せばやがてシーア派の怒りは頂点に達し、政府やスンニ派への闘争が始まる。シリアで起こっているような熾烈な宗派闘争へと発展する可能性は決してゼロではない。

サウジ政府としてはシリアやイラク、イエメンで起こっているような宗派闘争が絡む内戦は断固として避けたい事態である。そのため治安を強化し、イスラム国と関係ありそうな人物の摘発に躍起になっている。サウジアラビアは多くの外国企業が国内で操業している。世界最大の産油国である同国の政情が不安定になれば、世界的な影響は避けられない。

アメリカとの関係が険悪な今、アメリカの支援は望めない。自力でテロと向き合っていかなくてはならない新国王の直面する問題はあまりにも深刻である。

6月12日

戦争のコスト

ブラウン大学のワトソン研究所では、2001 年から 2014 年の間のイラク、アフガニスタン、パキスタン に係る「戦争コスト」を詳細に調査し、報告書を発表した。アメリカが始めたテロとの戦争で払ったさまざまな代償が経済、環境、社会、インフラ、人、教育などに及ぼす影響について報告されている。

米軍の犠牲者はおよそ 6800 人、コントラクター従業員が 6780 人とされている。もちろん怪我や後遺症に悩む帰還兵はさらに多い。だが最も犠牲を払ったのはイラクやアフガニスタン、パキスタンの一般市民だろう。3 カ国で１７，４０００人が犠牲になったといわれている。おそらく現実にはもっと多くの市民が犠牲になっているに違いない。けがや難民となって家を追われた人々に至ってはもはや数字を挙げること

すら意味がない。

イラク侵攻時には一人のイラク人を米軍が殺害すれば少なくとも１０人の敵を作ると言われていた。戦争が始まったころこどもだったイラク人は戦時下で育ち、今なにを思うのだろうか。彼らがアメリカに対して敵意を燃やしていても不思議ではない。

イラクやアフガニスタン、パキスタンが受けた環境的、社会的ダメージになるとさらに今後数十年にわたって悪影響をもたらす。たとえばイラクでは大学が破壊されたり、教授たちが誘拐、殺害されたため大学が機能せずもはや人材を育てる教育システムがない状態である。

環境汚染も深刻である。アメリカの軍用車両が使用したガソリンや空爆による大気汚染はイラクやアフガニスタンやパキスタン国民に深刻な健康被害をもたらしている。さらにコバルトなどの有害物質も大量に飛散している。イラクやアフガニスタンの状況から考えて対策が取られているとは思えない。

アメリカはイラクへの戦争を開始するとき、民主主義をもたらすためだとのウイルソン主義を振りかざしていた。今のイラクやアフガニスタンに民主主義がどれほど根付いたのだろうか。民主主義のレベルはイラクで 167 国中 113 位、アフガニスタンは 153 位と最低ランクに位置する。まったくその目的は達成されていないことになる。イラクにいたってはＩＳの台頭で安定とはほど遠い状況にある。

アメリカは 2001 年以降、戦争に 2.２兆ドルをつぎ込んだ。退役軍人への手当や医療費が今後 40 年間で 1 兆ドルになると試算されている。それらを合わせれば 2001 年から 2054 年までにかかる戦争コストは 4.4 兆ドルになる。アフガニスタンには駐留軍がいるため、その費用は年 790 億ドルと見積もられていて、コストは増える一方である。

もちろんイラクやアフガニスタンやパキスタンは社会のインフラが破壊され再建もままならない。人的社会的代償になると数字では表せない。

これほどの代償を払うことになる戦争を当時のブッシュ大統領は「正しい戦争」と言い切った。アメリカの大統領は 4 年の任期で終わるが、戦争の代償は結局は国民が何世代も背負っていかなければならない。 戦争をするための理由に正当なものは決してない。イラク戦争開始に真っ向から反対した元軍人のオドム氏の言葉は重い。

6月19日

あと何回悲しみのスピーチをすればいいのかーオバマ大統領の悲痛

「何度同じスピーチをしてきたことか」

冷静沈着なオバマ大統領が、このスピーチの時はいつも感情を顕わにし涙ぐむ。18 日、サウスカロライナ・チャールストンにある由緒ある教会で銃が乱射され、祈りを捧げていた 9 人が死亡、1 人が怪我を負った。 この教会は 1816 年から始まり、黒人の救いの場として祈りの場として地元では深く根付いた由緒ある教会である。18 日の午後 8 時から始まった勉強会に参加した 21 才の青年は 1 時間ほど祈りを捧げた後、突如として銃を乱射して逃亡した。警察はこの犯罪を「憎悪犯罪」と断定し青年を容疑者として 14 時間後に拘束した。

犠牲になった牧師の中にはオバマ大統領の親しい牧師もいた。「この教会は黒人の奴隷制度を廃止する活動をしたため燃やされたこともある。黒人が教会に集うのを禁止された時代にはこっそり人々は教会を支えた。公民権運動が盛り上がった時には

ここで演説が行われ平和の行進はここから始まった」 とオバマ大統領は、この教会はまさにアメリカの歴史そのものだと語った。

オバマ大統領は就任以来、銃乱射のたびに悲しみのスピーチを 14 回繰り返してきた。そのたびに議会に銃規制を呼びかけた。だが、銃の保持は憲法に保障された権利である。せめて殺傷力の高い銃を規制しようと法案を練るが議会を通過することはない。大統領といえどもどれだけ多くの犠牲が出ようとも力が及ばないのである。

小学校やショッピングモール、そして教会でも銃が乱射され多数の犠牲者が出る、そんな先進国はアメリカの他にはない、とオバマ大統領は銃の規制を再び訴える。